

第二八八次調査出土木簡

朱雀大路西側溝SD二六〇〇

〔戸カ〕

①・召 氷□

・内舎人尊

(77)・29・5 019

②・下道郡□ □□□下道臣三止

〔米 斗カ〕

・□□六□

165・21・4 011

③・備後国西良郡□□米

□

(109)・(12)・5 039

④・犬養部

第二九〇次調査出土木簡

(72)・(13)・3 081

朱雀大路西側溝SD二六〇〇

⑤・隱伎国周吉郡奄可郷吉城里

・服部屎人軍布六斤養老四年

128・26・3 031

⑥・阿波国生鰻五十貝

126・23・5 033

⑦・波米五斗

(114)・24・5 039

区の遺構は大変希薄であり、出土遺物も少ないため、どのような機能をもった施設が存在したかを推し量ることは困難である。ところで、大学寮に推定されている左京三条一坊七坪（奈文研『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993）は、やはり建物の密度が低い。宮外官衙を想定するならば、宮付近では空閑地が多い構造という共通性が存在

した可能性もあろう。いずれにしても、本調査区が奈良時代においてどのような利用をされていたのかは、今後の研究課題である。

条坊関係では、北西区で検出した西一坊坊間東小路と朱雀大路との関係について触れておきたい。朱雀大路は、平城宮の正門（南面中門）・朱雀門から平城京の正門・羅城門まで一直線に伸びる平城京のメインストリートである。したがって、その道路心は、朱雀門心と羅城門心を結んだ直線と考えるのが最も適切であろう。朱雀門心の座標値は（X=-145,994.49, Y=-18,586.31）〔奈文研『平城報告IX』1978〕であり、羅城門心の座標値は井上和人氏の最新研究成果によれば（X=-149,771.38, Y=-18,569.12）〔『平城京羅城門の再検討』『年報1998-I』〕である。この2点を結んだ直線の国土方眼方位に対する振れはN0° 15' 39" W

となる。一方、西一坊坊間東小路は、今回の調査で得た道路心の座標値（X=-146,341.0, Y=-18,717.25）と平城宮跡第125次調査で得た九条大路北側溝付近での道路心の座標値（X=-149,738.32, Y=-18,701.87）〔奈文研『平城京九条大路』1981〕から、国土方眼方位に対してN0° 15' 34" Wの振れをもつことがあきらかになった。この2つの値はきわめて近似しており、朱雀大路心と西一坊坊間東小路心がほぼ正しく平行に施工されていることを確認した。また、今回の調査地点で西一坊坊間東小路と朱雀大路との心々間距離は132.50mという値を得る。これは1大尺=0.354mと仮定すると374.3大尺にあたり、西一坊坊間東小路が朱雀大路から心々間距離375大尺の計画線通りに施工されたことを示している。

（西山和宏・小野健吉）

平 城 専 こらむ 欄 ①

現場班メンバー一覧

	春	夏	秋	冬
考古第1	加藤真二	小林謙一	臼杵 勲	高妻洋成
考古第2	玉田芳英	金田明大	川越俊一	
考古第3	清野孝之	岩永省三	井上和人	山崎信二
遺 構	箱崎和久	浅川滋男	蓮沼麻衣子	西山和宏
計測修景	高瀬要一	平澤 毅	内田和伸	小野健吉
史 料	山下信一郎	渡邊晃宏	館野和己	古尾谷知浩

色つきは総担当者

◆現場班ラインアップ

本年度は、秋を除く3現場で、95年度・96年度入所の新人がはじめての総担当者をつとめた。東面大垣とそれをはさむ2本の溝を掘った春現場（第274次）は、木簡ザクザクに総担当者、大興奮！ご満悦の日々がしばらく続いた。酷暑にたたられた夏現場は、東西一町ぶん（長さ110m）の溝（第281次）と東院園池の掘り残し部分（第284次）。作業員さんの呼ぶ声に、総担当者、東へ西へ◎往復。アルバイトの女子学生に、この総担当者の姿はどう映ったのか？ 奈文研初の女性発掘調査員を迎えた秋現場は、東院隅周辺（第280次）。復原すすむ庭園をよこ目に、隅楼の遺構解釈は大苦戦。あやうし、H女史！中規模調査2本をメインとした冬現場は、小規模現状変更調査の雨あられ。総担当者の好采配が光る！（H）